

目 次

学長挨拶.....	池端 雪浦	(1)
言語運用を基盤とする言語情報学拠点	川口 裕司	(3)
まえがき	高垣 敏博	(5)
A Usage-Based Analysis of the Causative Verb <i>shi</i> in Mandarin Chinese	MIYAKE Takayuki	(7)
Patterns of Adjective Phrase Complement Sentences in Malay	SHOHO Isamu, UZAWA Hiroshi	(27)
Semi-Productivity and Valence Marking in Arabic: the so-called “verbal themes”	RATCLIFFE Robert R.	(71)
Two Turkish Clause Linkages: -DIK- and -mE- —A pilot analysis based on the METU Turkish Corpus—	KAWAGUCHI Yuji	(85)
Argument Structure in Discourse: Argument Choice in Possessive Constructions in Nuuchahnulth	NAKAYAMA Toshihide	(113)
Verb Constructions in English and Japanese —A Contrastive Study on Semantic Principles—	SOHMIYA Kiyoko	(133)
A Correspondence between N ₀ -V-N ₁ -de-N ₂ and N ₀ -V-N ₂ -Loc-N ₁ in French: Case of <i>planter</i>	TSURUGA Yoichiro	(153)
On the Productivity of the Spanish Passive Constructions	TAKAGAKI Toshihiro	(173)
Index		(195)

学長挨拶

池端雪浦（東京外国語大学学長）

2002年度から開始された文部科学省の「21世紀 COE プログラム」は、我が国の大学に、世界最高水準の研究教育拠点 (Center of Excellence) を学問分野毎に形成し、研究水準のいっそうの向上と世界をリードする創造的な人材の育成をめざしています。本学は、「人文科学」と「学際・複合・新領域」の2つの学問分野にそれぞれ1件の申請を行い、そのいずれもが採択されるというすばらしい結果をえました。本学大学院地域文化研究科の、個性ある研究教育のポテンシャルティが高く評価されたことを嬉しく思います。

本学では、ヨーロッパ、南北アメリカ、オセアニア、アジア、アフリカと世界のほぼすべての地域にわたって、言語学、文学、歴史学、哲学・思想、文化人類学、社会学、政治学、経済学などさまざまな学問分野のすぐれた専門家が協働して教育と研究にあたっています。

こうした地域研究や文化研究を行うにあたっての基盤となるのが、外国語能力です。50にのぼる言語と世界諸地域の文化・社会について教育研究を行っている本学は、言語と専門分野のダブルメジャー制の下で、高度な言語運用能力と、世界諸地域の文化と社会について深い知識を身につけて、異文化間の相互理解と地球社会における共生の実現に貢献できる人材の養成に努めてきました。2000年秋に移転を実現した府中キャンパスは情報環境が整備されており、インターネットや学内 LAN はもとより、パソコン台数やそれらを用いた情報リテラシー教育の水準は、国内の文科系大学としてはトップレベルにあると自負しております。このような素晴らしい情報インフラに支えられ、本学はマルチメディアやインターネットを駆使し、多様な方法を動員した先進的な言語教育を目指しています。

今回、21世紀 COE 拠点に採択された「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」は、本学の将来計画の上に構想されたプロジェクトであります。推進メンバーの方々が精力的にプロジェクトに取り組み、実りある成果をあげ、COE 拠点から次世代のわが国の外国語教育を担うべき人材が多数輩出されることを願ってやみません。21世紀 COE プログラムの成功のために、本学の叡智を結集し、大学全体として協力してゆく所存です。

2003年3月1日

言語運用を基盤とする言語情報学拠点 Center of Usage-Based Linguistic Informatics (UBLI)

川口裕司 (COE 拠点リーダー)

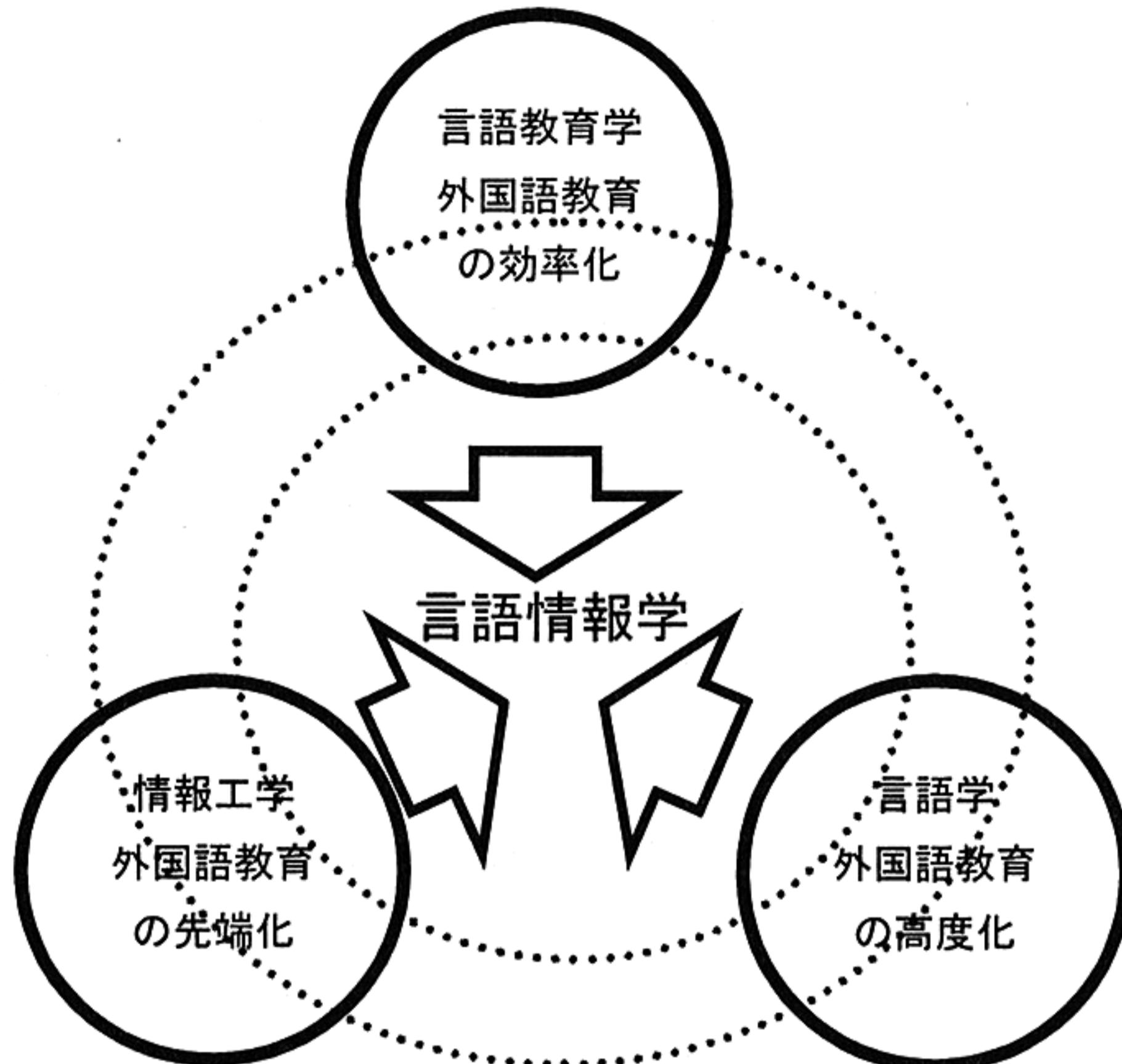
言語情報学 (Linguistic Informatics)

本 COE 拠点の目的は、情報工学の基盤の上に言語学と言語教育学を有機的に統合し、言語情報学という新たな統合的学問分野を創成することである。

言語情報学の目にみえる成果としては、以下の三つを挙げることができる。

まず 17 言語を擁する TUFS 言語モジュールと呼ばれるウェブ教材の開発がある。次に、それを応用した多言語 e-learning システムの構築があり、最後に、内部・外部の評価に基づく通言語的な言語能力記述モデルの確立がある。

ボーダレスな多言語時代に入った現在、高度な言語運用能力をもち、IT 技術を駆使した先端的な言語教育を行いうる優秀な若手研究者の養成は、言語教育現場の長年のニーズに応えるものでもある。本 COE 拠点では 4 つの班が組織化され、それがある程度独立しながら研究を進めている。



研究組織

TUFS 言語モジュール開発と各班の関係は以下のようになる。言語学班と言語教育学班が連携して言語素材を作り、情報工学班がそれをウェブ化・e-learning 化する。言語学班は言語学的観点から、言語教育学班は学習者利用の観点から教材を分析・評価し、改良を続ける。言語情報学班はこの開発作業の全体を統括し指揮する。さらに各班は、TUFS 言語モジュール開発のための基礎研究も行なってきた。たとえば言語学班は、英語、フランス語、スペイン語、中国語、マレー語、トルコ語等で言語運用コーパスの構築やコーパス言語学的研究を行なうと同時に、情報工学班と連携し、コーパス分析ツールの研究も進めてきた。言語教育学班は三つのグループに分かれ、日本語と英語の学習者言語や中間言語の分析を行い、日本語の自然会

話コーパスを構築し、それを分析し、あるいは発音モジュールの評価アンケートを実施してきた。情報工学班はユビキタス環境の実現に向けた情報インフラの整備とe-learningシステム構築のための基礎研究を行なってきた。

この研究組織を統括するのは、事業推進担当者7名からなる統括班である。また各班の連携がより緊密になるよう、連絡班も設置されている。

21世紀COE拠点推進担当者

川口 裕司	フランス語学・トルコ語学	拠点リーダー、言語情報学統括
在間 進	ドイツ語学	言語教育学統括、言語情報学
富盛 伸夫	理論言語学	言語学
高垣 敏博	スペイン語学	言語学
敦賀 陽一郎	フランス語学	言語学
亀山 郁夫	ロシア文学	言語教育学
水林 章	フランス文学・歴史学	言語教育学
野間 秀樹	朝鮮語学	言語学
芝野 耕司	情報学	情報工学統括・言語情報学
梶 茂樹	音韻論	言語学
峰岸 真琴	言語学	情報工学・言語情報学
宇佐美 まゆみ	言語社会心理学・日本語教育学	言語教育学

統括班 在間 進、高垣 敏博、敦賀 陽一郎、芝野 耕司、峰岸 真琴、
宇佐美 まゆみ、川口 裕司

連絡班 浦田 和幸、黒澤 直俊、海野 多枝、吉富 朝子、佐野 洋、
林 俊成

2004年3月1日

まえがき

高垣 敏博

文部科学省 21 世紀 COE プログラムにより選ばれた東京外国語大学のプロジェクト「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」は、近年めざましい発展を遂げた情報工学の成果を活用しつつ、言語学と言語教育学の有機的な統合を図ることにより、「言語情報学」(Linguistic Informatics) を創成することを目的とする。膨大な言語データの集積と分析に基づいて言語運用の実態を解明することにより言語研究の新分野を切り開き、さらにその成果を言語教育へと応用していくことをめざしている。

そこで、言語教育への応用を視野に入れつつも、日本語を含む世界諸地域の言語のコーパスを活用した個別研究を可能な限り推進することが最重要課題となる。東京外国語大学は 26 専攻語を擁し、それらを含めると 50 にものぼる言語の研究・教育が行われている。言語研究の成果の蓄積の上に語学教育が実践されてきたといえる。本プロジェクトでは各言語のコーパスを構築し、それを基盤に、言語理論の一層の精度化をはかること、また言語間対照分析を多角化することなども期待されている。

本拠点を支える言語学班、言語教育学班、情報工学班、言語情報学班の中で、言語学班では、こうした目標を達成すべく、個別言語のコーパス構築とコーパスに基づく言語学研究の成果を『言語情報学 2 言語学研究論集 1 文構造とコーパス分析』(Linguistic Informatics II Linguistic Studies I Corpus-based analyses on Sentence Structures) としてまとめることにした。以下に収められた論文はすべて本学の研究者によるもので、個別言語コーパスを基盤とした言語分析を中心とするが、言語の理論的分析をテーマとするものも含まれている。

まず、三宅登之による「中国語における使役動詞“使”の言語使用に基づく分析」(A Usage-Based Analysis of the Causative Verb *shi* in Mandarin Chinese) は使役動詞「使」の意味構造を現代北京語のコーパスにより性格づけようとするものである。使役動詞「使」の前に位置する成分が、従来考えられているように人称代名詞であるよりも、節である場合がプロトタイプであり、副次的であるとされていた複文構造がむしろ有力であることを明らかにした。また、「使」使役文が口語よりも書面語で多用されることがデータから立証された。

正保勇・鶴沢洋志による「マレーシア語における形容詞句補文のパターン」(Patterns of Adjective Phrase Complement Sentences in Malay) では、形容詞句補文に、有形主語が現われるものと、現われないものの 2 種類を認めることができると主張した。さらに、難易構文 (tough constructions) 以外に、形容詞句補文中に主文の主語と同一の解釈を受ける空所が存在する構文があるが、このような構文は今回のコーパス中には一例も見当たらなかったことから、これは話し言葉に特徴的に現われる構文であるという結論を得た。

ロバート・ラトクリフは「アラビア語に於ける派生動詞の半生産性と結合価」(Semi-Productivity and Valence Marking in Arabic: the so-called “verbal themes”)において、従来、音韻・形態的記述がなされるものの、その意味的対応が明示的ではなかったアラビア語の派生形動詞体系を扱っている。生産的な中心部に注目することにより、普遍的な結合価を論理的に表すシステムであるという仮説を提案している。

川口裕司による「トルコ語の2つの節結合：-DIK-と-mE- —METU トルコ語コーパスの分析」(Two Turkish Clause Linkages: -DIK- and -mE- ---A pilot analysis based on the METU Turkish Corpus---) は現代トルコ語の2つ節結合辞の分布を書き言葉コーパスにより分析している。主動詞を意味カテゴリーにより3種類に分け、それぞれが2つの結合辞と特徴的な結合傾向を見せることを明らかにした。

中山俊秀は「談話の中での項構造：ヌートカ語所有文での文法項の選択について」(Argument Structure in Discourse: Argument Choice in Possessive Constructions in Nuuchahnulth) でカナダ、ブリティッシュ・コロンビア州に見られるワカシュ語族ヌートカ語の所有表現の交替について考察している。通常被所有者が主要素である所有表現において、所有者が文法項として名詞句から取り出されるヌートカ語の「所有者繰上げ」(possessor raising) が起こるのは、被所有者が談話上より重要な位置を占める場合であることを談話構造の視点から明らかにしている。

宗宮喜代子は「英語と日本語の動詞構文—意味の観点からの対照研究ー」(Verb Constructions in English and Japanese ---A Contrastive Study on Semantic Principles---) で英語と日本語を、世界観の違いに通じる根本的な違いを有する言語として分析、比較する。すなわち英語では、SVOの語順がレイアウトとして意味をもち、文は視覚的に時間軸に沿った因果関係を表すのに対し、日本語では、「が・を・に」が日本語話者の心理空間に共有される empathy の階層を指示することで、出来事を常に空間的・心理的な状態として捉えようとすることを論じる。

敦賀陽一郎による「フランス語における N_0 -V- N_1 -de- N_2 と N_0 -V- N_2 -Loc- N_1 の対応関係 (planter の事例)」(A correspondence between N_0 -V- N_1 -de- N_2 and N_0 -V- N_2 -Loc- N_1 in French:Case of planter) は、到達の結果を表す他動詞で、「交差」構文 N_0 -V- N_1 -de- N_2 、「標準」構文 N_0 -V- N_2 -Loc- N_1 (Loc:場所の前置詞)、そして N_0 -V- N_1 -avec- N_2 構文は構成するが、 N_2 -V- N_1 構文のみは認めないわずか13の動詞から planter 「植える、据える」を選び、コーパス分析を通して第四構文が不可能である要因を探っている。

高垣敏博の「スペイン語受動文の生産性について」(On the Productivity of the Spanish Passive Constructions) ではスペイン語の2種類の受動文--英語の受動文に似た ser を用いた受動文と se を用いた再帰受動文--の頻度をコーパスにより検証し、ser 受動文には時制アスペクトと語彙アスペクトの制約による使用制限が見られること、再帰受動文がこれを代替している可能性を示した。

本書に収められたような試みを出発点として、今後、分析対象をより多くの言語に拡大し、また、より多様な研究方法を用いることにより、コーパスに基づく言語研究の基盤を充実、発展させていかねばならない。

言語情報学 2 言語学研究論集 1
文構造とコーパス分析 (Corpus-Based Analyses on Sentence Structures)

2004 年 4 月 21 日発行

発 行： 東京外国語大学大学院地域文化研究科
21世紀 COE プログラム
「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
編 者： 高垣敏博、在間進、敦賀陽一郎、川口裕司
製 作： 株式会社 雄松堂出版
印 刷： 港北出版印刷 株式会社

This publication is not for sale.

